
螺旋

冬桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

螺旋

【Nコード】

N97560

【作者名】

冬桜

【あらすじ】

つまらないようであれば、即座にドロップアウトを推奨します。これを読んで生じる如何なる感情&時間的損失にも責任を負いかねますので、そのへんご注意ください。

(前書き)

つまらないようであれば、即座にドロップアウトすることを推奨します。

これを読んで生じる如何なる感情&時間的損失にも責任を負いかねますので、そのへんご注意下さい。

変わらずの闇。何度も目を開き直したが何も見えなかった。あたりを支配していたのは暗闇。一人でいるにはあまりにも心細い。何故ここにいるのか。何故こんな状態になっているのか。何故こんなに暗いのか。考えてみるが何も思いつかない。せめて、目が慣れれば少しはまわりが見えてくるかもしれないと思ったが、待てど暮らせど変わらなかつた。

何も見えないのに何をすればよいのか。手の届く範囲には何も無い。余計な思考ばかりが空回りしていく。何もできないのに頭ばかりまわるのは、心の余裕を削りとるのに十分だった。

そんなときに聞こえてきた。いや、そんなときだから、か？

「あなたは誰ですか？」

不気味に響く声。無機質な声だと思った。それはどこからもなく聞こえてくる。前か後ろか右か左か……。

「もう一度聞きます。あなたは誰ですか？」

「お前こそ誰だ」

「私は私です。して、あなたは？」

「答えになつてない。ここはどこだ？ あんたは誰だ？」

「否、ここはここで、私は私です。これ以上でも以下でもありません。故に、これ以上の回答は望まれるべきではありません。再度回答を求めます。あなたは誰ですか？」

「はっ、馬鹿にするのも大概にしるよ。あんたがあんたなら、俺は俺だ。以上でも以下でもない」

「了解しました。あなたはあなたですね？ では、あなたがあなたである証明をして下さい」

「わかんねえな。こんな質問に何の意味がある？ お前がお前で俺が俺。双方が同意したのなら、それでいいじゃねえか」

「否、私は私を認められますが私はあなたを認められない。故に、

その証明を求めます」

「あーっ、むかつくな。お前が俺をこの場所に連れてきたんだろ？ さつさと俺を元の場所に戻せ。こんな無駄なことしてるほど人生長くないんだ」

「回答不可能と判断します。次の質問です。あなたは何故ここにいるのですか？」

「そりゃ、こつちの質問だ！！ ってか無視かよ！！ 理由なんか知るか！！」

「否、質問の意味は『今のあなたは何故あるのですか』です。」

「知るか！！それに、どつちにしたって理由なんかわかんねえよ。・

・今の俺があるのは過去の俺があるからだろ」

「では、過去の記憶と解釈してよろしいのでしょうか？」

「はいはい。それでOKだ」

「では、その記憶がなくなつたと仮定すると、今のあなたは消えてなくなるのでしょうか？」

「無駄だな。記憶は記憶。俺は俺。同列に扱えるもんじゃねえよ。記憶が消えても俺は残る。俺が消えても記憶は残る」

「否、あなたが消えれば記憶されないのではないのでしょうか？」

「俺の中の記憶が全てじゃないだろ？ 人と話せば相手に俺と話した記憶が残る。物に傷をつければそれもまた残る」

「否、物に残るのは傷跡です」

「話通じねえやつだな。俺がそこにいて傷をつけたから、その傷跡があるんだろ？ じゃあ、俺が傷をつけた記憶といつても問題ないだろ。その記憶を読み取れる奴がいるとは思えないが・・・」

「了解です。それも記憶としましょう。では、それら全ての記憶を消せばあなたは消えるのでしょうか？」

「さつき言つたじゃん。消えないって」

「あなたの痕跡が全て消えても、ですか？」

「いちいち話のでかい奴だな。じゃあ、もしこの世界に何の痕跡も残せなかつた奴がいれば、それは存在しなかつたことになるのか？」

「否、それは不可能であると判断します」

「・・・いいよ、疲れた。とりあえず、ここから出してくれ」

「では、再度あなたがあなたである証明を求めます」

「それをしないと出してくれないのか」

「はい」

「あんたが俺と話している事は証明にならないのか？」

「否、あなたはあなたであるという記憶を持った別の誰かである可能性があります。もしくは、あなたは今ここに突然出現したとも考えられます」

「そりゃすごい。どつかの世界のスライム並の価値しかないのな。俺って」

「その可能性があると言っているだけです」

「否定しないんだ・・・。はあ、証明っていつてもなあ。そもそも、他人がいないと始まらないんじゃないか？ 誰か証人を連れてきて、『間違いなく君は君だ！』って認めてくれるとか。・・・ただの馬鹿じゃん」

「では、一人では証明できないと？」

「そう思うよ。だって、俺が俺って言っても意味ないんだろ？ じゃあ、代わりに証人なり証拠物品用意するしかないだろ」

「しかし、あなたは記憶が消えてもあなたは消えないと言いましたか？」

「そうだな。ってことは証明不可能じゃん。あーーツ、やっぱ無駄な押し問答だった！！ あれっ？ ってことはこっから出られない？」

「そうなります」

「あっさりしてんな。それ以前に、記憶が消える前提っておかしくない？」

「人智を超えた能力があるかもしれせん」

「理屈っぽいと思ったら案外メルヘンだな」

「しかし、ないと証明することはできないはずだ」

「それはそうだが。・・・逆に俺が俺でない証明ができればいいのか？」

「できませんか？」

「そっちがしてくれよ・・・。あんたが俺が俺でない証明をしようとしてできなければいいんだから」

「否、私は私です。故に私以外は想定できかねます」

「嫌なら嫌って言うていいよ？ 回りくどい言い方しなくても」
「嫌です」

「ストレートにありがとうございます。で、俺が俺でない証明ね。そつだな、仮に記憶が消えたとすれば、俺は俺でないと云えるのか？ 仮に記憶が改竄されたとして、俺は俺でないと云えるのか？」

「消えた場合、あなたという存在自体が認識不可能になります。改竄された場合、他人のことを自分と言うようになります」

「・・・なんか考え方が違う気がする」

「と、言いますと？」

「例えば、記憶喪失になったとしよう。そうすれば、全く知らない相手から親しい声をかけられる可能性もあるわけだ。となると、その時に自分には本来存在したはずの記憶の欠落を認識できる。この欠落した記憶に俺である要素はどこにある？」

「ですが、全ての記憶がないというのは、生まれたての赤子同然だと考えられます」

「だから、記憶は俺の証明をしてくれるかもしれないが俺自身ではないだろ？」

「では、記憶を全て捨てても大丈夫だと？」

「最初からそう言ってるじゃん。俺にとってのあんたは、今のこの会話によって認識された。それは、同時にあんたにとっての俺が認識されたわけだ。もしこの認識が俺だと言うならば、俺を見た人数分だけ俺が存在することになるわけだ。例えその認識が実像からかけ離れていたとしても。でも、それはおかしいだろ。俺は一人で、俺自身の認識が間違っていたとしても俺は一人だ」

「では、あなたは自身の認識ですらただのイメージだと？」

「そうだ。実像なんざわかるはずがない」

「確かにそれだと、記憶は意味を成しませんね。ですが、実生活において他人からの認識は重要な価値を持つものだと思います」

「よく言うよ。今更、実生活とか。結局、他人は他人でしかないんだって。俺は他人のことを1%ですら理解できるとは思っていない。そしてそれは自分も然りだ。だからこそ、他人を理解するために努力するものだと思うてる。例え1%未満でも」

「冷めてますね。ですが、それは事実と受け取りましょう」

「どうも。だから現状では、俺が俺である証明はできないし、俺が俺でない証明もできない」

「了解です」

「で、出してくれないわけ？」

「どうしましょうか？」

「聞くな。そして、問答無用でこっから出してくれ」

「仕方ないですね。これ以上は無意味のようですし。では、目を閉じて下さい」

「はいはい。閉じたよ。閉じてもなんも変わらないけどね」

「では、目を開けてください」

「！？、変わってないじゃん」

「では質問です」

「待て、無限ループのつもりか？」

「いえ、単なる冗談です。では、今度こそ」

もう一度、目を閉じてみる。すると、それが合図であったかのように、一瞬の浮遊感に襲われ、段々と意識が遠のいていった。

「あなたがあなたで在ることを」

最後に聞こえたのはこんな言葉だったか。そして、完全に意識は途絶えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9756o/>

螺旋

2010年11月17日19時25分発行